

**英米文化学会第11回大会開催のお知らせ (既報)**

- ◆ 開催日時：平成5年9月18日(土) 9時-17時30分
- ◆ 会場：上智大学紀尾井坂ビル1F (JR・地下鉄丸の内線四谷駅下車徒歩8分)
- ◆ 受付開始：9:00
- 挨拶：9:30-9:40 英米文化学会会長 名和 雄次郎 (拓殖大学教授)
- 研究発表：9:40-15:20
1. 短期大学における英語科教育法の考察 小林 多佳子 (昭和女子短大)
  2. フランク・ノリスと世紀末のサンフランシスコ 有馬 健一 (國學院大)
  3. あとは、沈黙 門野 泉 (清泉女子大)  
——Measure for Measure の終幕——
  4. ピンチョンとアメリカン・サブライム 樋口 日出雄 (梅光女学院短大)
  5. ビデオを用いた授業の試み 亀山 孝 (共愛学園高校)  
——第4分科会共同研究報告—— 高橋 祐子 (文教大学女子短大)  
藤田 牧子 (神奈川県立上鶴間高校)
- ◆ 講演 (15:30-17:00)
- 演題：英語辞書の今日的問題点 小島 義郎 (早稲田大学教授)
- ◆ 会費：一般500円 学生300円
- 大会事務局：〒101 千代田区神田小川町3-20-4 第2龍名館ビル5F  
日本大学歯学部 佐藤研究室 電話 03-3219-8160 (直)

**英米文化学会第83回例会開催のお知らせ**

- ◆ 開催日時：平成5年11月20日(土) 午後3時(現地集合) ~ 11月21日(日) 午前11時(現地解散)
- ◆ 場所：MRAハウス・アジアセンター 小田原駅 (JR・小田急) よりタクシー5分  
神奈川県小田原市城山4-14-1 TEL 0465-22-6131 FAX 0465-22-2466
- 第1日 (11月20日)
- 研究発表 (4:00~6:00) 会場：「箱根」  
2本の研究発表を予定しています。発表者・司会者は未定。
- 忘年会 (7:00~9:00) 会場：「紅葉」
- 第2日 (11月21日)
- 分科会報告等 (9:00~11:00) 会場：「箱根」
- ◆ 会費：15,000円 (交通費以外の全費用を含む)
- ◆ 宿泊室：1. シングルルーム (8,000円) 5室、2. ツインのシングルユース (12,000円) 10室、3. ツイン (7,500円) 15室を確保してありますので、参加希望者は部屋の種類と料金を明記の上、10月10日までに必ずはがきにて企画理事の石田雅近先生に連絡してください。申込先着順に決定されます。

**本号の主な内容**

第11回大会のお知らせ・・・p. 1  
第83回例会のお知らせ・・・p. 1

第11回大会研究発表レジメ・・・pp. 2-3  
書評・・・p. 3  
分科会活動状況報告・・・pp. 3-4

## 第11回大会研究発表レジメ

### 1. 短期大学における英語科教育法の考察

小林多佳子

現在、短期大学での英語科教育法は、さまざまな問題を抱えている。短期大学で教職課程を修了しても、二種教育職員免許状しか取得できず、実際に中学校で教職につくことが困難である場合も少なくない。また、短期大学卒業生が、四年制大学に編入した場合、教職課程の単位は認められず、最初から履修しなおさなければならない等、不利な点も見受けられる。

こうした問題点をふまえた上で、短期大学でどのように英語科教育法を教えるのが効果的であるのか、実際に授業で取り上げた、さまざまなトピックに対する学生からのフィードバックを通して、今後の展望を考察していく。

### 2. フランク・ノリスと世紀末のサンフランシスコ

有馬 健一

アメリカの「自然主義」小説家、フランク・ノリス (1870~1902) の七つの長編小説のうち、シカゴを舞台とした *The Pit* 以外の六編までが19世紀末のサンフランシスコを主要な舞台として書かれている。もっともそのうちのひとつ *A Man's Woman* の背景は“the City”とされるのみで、語り手も読者も暗黙のうちに十分に了解はしていても、そこがサンフランシスコと明示されることはないのだが。 *McTeague*, *Vandover*, *Octopus*, *Moran*, *Blix* にはサンフランシスコの文学、芸術、ジャーナリズム、風俗等についてほとんど固有名詞を使って具体的に詳細に描かれる。もちろんノリスのこれらの作品はルポルタージュではなくきわめて意識的に書かれたフィクション、小説である。ノリスの南アフリカ (ジェームズソン侵入事件) やキューバ (米西戦争) でのジャーナリストとしての体験や少年時代の画学生としての二年間のパリでの生活が彼の想像力と審美観を多彩なものにしていたと言えるだろう。サンフランシスコのジャーナリズムの世界で育った作家ノリスはその短い生涯にもかかわらず長、短編小説の他に多くの書評や評論、さらに詩や挿絵までをも残している。ここでノリスの長編小説群を綿密に分析し様々な角度から光を当てることにより、今日の我々は、作者の想像力の質や文化への判断能力のみならず当時のサンフランシスコの文化の実態を捕え直すことが出来よう。

### 3. あとは、沈黙

門野 泉

— *Measure for Measure* の終幕 —

『尺には尺を』は、『終りよければすべてよし』、『トロイラスとクレシダ』等と共にシェイクスピアの問題劇と称されている。

とりわけ『尺には尺を』は、喜劇の構造を持ちながら、喜劇の生み出す開放感、充足感が十分に感じられない不思議な劇である。終幕では、絡み合った問題が公爵の手で矢継早に解決され、急ピッチでウィーンの秩序が回復される。それにもかかわらず、公爵の大岡裁きが何かしら空虚に感じられるのは、助けられた人々が喜びを表現しないからである。雄弁な登場人物が、なぜ突然沈黙するのか。

この沈黙の意味を考える一つの手立てとして、『尺には尺を』のソース (材源) と『尺には尺を』とを比較検討し、シェイクスピアの作意を探ってみたい。ソースの美談をデフォルメし、終幕を盛り上げる台詞を登場人物から奪ったシェイクスピアの意図は一体どこにあるのか、『尺には尺を』とはどういう芝居なのか等を考察する予定である。

### 4. ピンチオンとアメリカン・サブライム

樋口日出雄

今世紀の巻頭を飾ったパリ万博に出向いて、テクノロジーの申し子「ダイナモ」をまのあたりにしたアメリカの歴史家ヘンリー・アダムズは、これを深く敬い恐れた。

アメリカ人が超個人的な存在として崇高性 (sublime) を追い求めていることを熟知していたアダムズは、ダイナモがアメリカ人の崇高性にとって代ることを予知できたのである。

トマス・ピンチオンも、また深くこの崇高性とかかわっている。 *The Crying of Lot 49* (1967) では、正体不明の郵便制度をこの崇高性を体現するものとして描く。電子のタッチで様々な財に向って触手を伸ばし、資本を吸い上げる組織「トリステロ」がそれである。今回の発表はこのアメリカン・サブライムとピンチオン作品との関連を跡づけることになろう。

## 5. ビデオを用いた授業の試み

視聴覚教材の授業における効果的な使用方法やその結果が広く公開され、視聴覚教材の有効利用について各英語教育の場で論議的となっている。

今回の発表では、視聴覚教材の内でも特にビデオを用いた英語授業に焦点を絞って、各学校での実践の経過報告をまとめたものを披露する予定です。同一のビデオ教材を、各学校において、その生徒・学生のレベルに合わせて授業内で用いた具体例と共にそれ以外の可能な使用方法も紹介する予定です。

これは昨年1992年に結成された英米文化学会・第4分科会(英語教育)による発表であります。1993年の新年度より各学校で実践している「ビデオを用いた授業計画」の中間報告となるものです。

## 書評 マーク・トウェイン文学の宝庫を探る 軽快な文体と多彩な話題に注目

マーク・トウェイン著、勝浦吉雄・訳『ミシシッピ河上の生活』、文化書房博文社、平成5年3月刊

連日、ミシシッピ河大洪水のニュースが報じられている。いまさらながらその河の強大さと、災害規模の大きさに驚嘆と同情を感じる。それと同時に、ミシシッピ河にあらためて興味と感心を抱いたのはわたしひとりではなかろう。そんな折りに、この河と流域に関するマーク・トウェインの『ミシシッピ河上の生活』を読み易い日本語で再度読む機会を与えてくれた訳者勝浦吉雄氏にまず感謝する次第である。

全長4300マイルのミシシッピ河とその周辺の風土・伝説・エピソードなどを、おもしろ可笑しく、簡潔な文体で描き出している『ミシシッピ河上の生活』(1883)は、躍動感あふれる傑作である。特に、作者が水先案内見習いで、外輪船を操りながら観察した千変万化する河の流れや周囲の風景は、まるで、読者に、同じ船に乗っているような臨場感と軽い興奮すら与える。さらに、通り過ぎる河畔の都市や町に纏わる伝説やエピソードは、どれ一つ取り上げても、読者の関心を引かないものはない。巧みな話術と構成によって、読むものを引きつけて最後まで放さない筆力は、さすが大作家マーク・トウェインである。中には、作者独特のジョークや大法螺、それに、相当にフィクション性の強いエピソードも含まれているが、これらが、写実的で、かつ、躍動感あふれる表現とみごとに混ざり合って、むしろ、作品のアクセントとなり、単調に流れるのを巧みにカバーしつつ、全体的に統一した作品に仕上げている。

思うに、『トム・ソーヤの冒険』(1876)や『ハックルベリ・フィンの冒険』(1885)等の傑作も、ミシシッピ河とその周囲の自然や、それに纏わる膨大な伝説やエピソードなどの文学的宝庫の中から釣り上げた大魚のようなものである。この本を読み終えて、まだまだ、多くの大魚が潜んでいるような気がしてならない。ただ、残念な事は、マーク・トウェインがこの2作を最後に、釣りをやめてしまったことである。もうすこしじっくりと腰を落ち着けて釣りを続けていたら、さらに素晴らしい作品が生まれたかもしれない。そう思うと、この『ミシシッピ河上の生活』は、マーク・トウェイン文学の宝庫とも、源泉とも言える。

勝浦吉雄氏の訳は、作者マーク・トウェインを彷彿させるほど自然で、かつ、軽妙洒脱な日本語で書かれ、とても読み易い。さらに、作者特有の方言や俗語の表現一つにも心を砕いて、木目こまかく、かつ、充分に配慮の行き届いた訳を心掛けられている。350ページにもわたる長編にもかかわらず、一糸乱れぬ調子を保っている点はまさに賞賛に値するものである。マーク・トウェインの研究者はもとより、一般の読者、特に、ものを書くことに興味のある者には必読の書である。是非一読を勧めたい。(英米文化学会副会長 高取 清)

## 分科会活動状況報告

### 1. 第1分科会

去る7月23日(金)に会合を開き、年内にまとめる予定の『たたかう性--英米文学作品におけるヒロインたち』(仮題)について検討しました。出席者は、吉田、相良、佐久田、五味田でした。次回は、9月13日(月)の予定。まとめた原稿について各自発表をし、質疑応答を計画しています。

### 2. 第2分科会

7月24日(土)に会合を開き、今回は、高取氏から、Mary Michael Wagner, "Acts of Kindness" (Prize Stories 1992 The O. Henry Awards) についての刺激的な発表があり、活発な質疑応答が行なわれました。出席

者は、佐藤（成）、高取、相良、君塚、五味田でした。

### 3. 第3分科会

5月8日（土）に会合を開き、各自が、研究中の作品についての原稿を秋までにまとめて本の形にしたいということになりました。シェイクスピアの作品と材源との研究が中心です。出席者は、佐藤（治）、小野、門野、山根、中村でした。次回のミーティングは、9月11日（土）予定です。

### 4. 第4分科会

6月27日（日）に会合を開き、第11回大会で研究発表する「ビデオを用いた授業の試み」について検討しました。出席者は、石田、石井、高橋、藤田、細田でした。次回は、8月29日（日）の予定です。

### 5. 第5分科会

7月24日（土）に会合を開き、日高氏が「アメリカの黒人のマスコミ（特にテレビ）の中でどうステレオタイプされて描かれてきたのか」について発表し、啓発的なQuestions and Answersが交わされました。出席者は、小河原、大島、有馬、石山、越智、笹川、日高、渡部でした。次回は、11月13日（土）の予定。渡部氏の発表を計画しています。（分科会理事 五味田）

## 会員の動き

### (1) 住所等の変更 (住所の前の数字は郵便番号です)

### (2) 新入会員

編集・発行： 英米文化学会編集委員会＝池田 広子、小川 喜正、岸山 睦、武井 朗子、中村 豪、  
宮崎 敬子、山根 正弘

発行責任者： 〒  中村 豪